

4.1 回転系の運動方程式

静止している直交座標系に対し, 第 3 軸を軸として一定の角速度 ω で回転する座標系の運動方程式を以下の手順で求めよ.

- (1) 静止している直交座標系の基底ベクトルを e_1, e_2, e_3 , 回転する座標系の基底ベクトルを e'_1, e'_2, e'_3 とする. このとき

$$\frac{de'_1}{dt} = \omega \times e'_1, \quad \frac{de'_2}{dt} = \omega \times e'_2, \quad \frac{de'_3}{dt} = 0,$$

であることを示せ. ただし $\omega = \omega e'_3$ である.

- (2) 位置ベクトル $r = xe_1 + ye_2 + ze_3 = x'e_1 + y'e_2 + z'e_3 = r'$ について以下の関係が成り立つことを示せ.

$$\begin{aligned} \frac{dr'}{dt} &= \frac{d'r}{dt} + \omega \times r', \\ \frac{d^2r'}{dt^2} &= \frac{d^2r}{dt^2} + 2\omega \times \frac{d'r}{dt} + \omega \times (\omega \times r'). \end{aligned}$$

ここで

$$\begin{aligned} \frac{d'r}{dt} &= \frac{d'x'}{dt} e'_1 + \frac{d'y'}{dt} e'_2 + \frac{d'z'}{dt} e'_3, \\ \frac{d^2r}{dt^2} &= \frac{d^2x'}{dt^2} e'_1 + \frac{d^2y'}{dt^2} e'_2 + \frac{d^2z'}{dt^2} e'_3 \end{aligned}$$

と表される回転系の時間微分である.

- (3) 静止系での運動方程式

$$m \frac{d^2r}{dt^2} = \mathbf{F}$$

を回転系の表現に変換せよ.

4.2 ローレンツ力

電場 E , 磁束密度 B 中を速度 v で運動する電荷 q を持つ荷電粒子は, 以下の式で与えられる力 F を受ける.

$$F = q(E + v \times B)$$

- (1) $E = 0, v = (u, v, 0), B = (0, 0, B)$ とする. このとき荷電粒子の運動方程式を求めよ.
- (2) $E \cdot B = 0$ とする. 速度 $E \times B/B^2$ で動く座標系から荷電粒子の運動を見た場合, F から電場が消えることを示せ.
- (3) 上記 (2) の場合において $E = (0, E, 0), B = (0, 0, B)$ のとき, 速度 $E \times B/B^2$ の大きさと向きを示せ.

4.3 中心力場の運動

ある点 (たとえば原点) からの距離のみによって決まる力を中心力と呼ぶ. 中心力 F は位置ベクトル r を用いて一般に

$$F = f(r) \frac{r}{r}$$

と表される. ここで $f(r)$ は r のみによって決まる関数である. このとき中心力の場の中で運動する物体について, 面積速度

$$\frac{1}{2} r \times \frac{dr}{dt}$$

は時間によらず一定であることを示せ.

4.4 スカラーの勾配

座標 x, y, z の関数 $f = f(x, y, z)$ が与えられた場合, 点 (x, y, z) における f の勾配 (gradient) は以下のように定義される.

$$\text{grad } f \equiv \frac{\partial f}{\partial x} \mathbf{e}_x + \frac{\partial f}{\partial y} \mathbf{e}_y + \frac{\partial f}{\partial z} \mathbf{e}_z. \quad (4.1)$$

ここで \mathbf{e}_i は i 方向の単位ベクトルである. grad はグラジエント, もしくはグラッドと発音する. (4.1) はハミルトンの演算子

$$\nabla \equiv \mathbf{e}_x \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{e}_y \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{e}_z \frac{\partial}{\partial z}$$

を用いると

$$\text{grad } f = \nabla f$$

と表される.

- (1) 固定点 P から一定の微小距離 dr だけ離れた点 Q がある. 点 P から Q へ移動した際の関数 f の変化が最大となるのは, ベクトル PQ が点 P における ∇f に平行な場合であることを示せ (ヒント: ベクトル PQ を $d\mathbf{r} = \mathbf{e}_x dx + \mathbf{e}_y dy + \mathbf{e}_z dz$ としてみよ).
- (2) ∇f は $f = \text{一定}$ の面 (これを等位面と呼ぶ) に垂直であることを示せ.
- (3) g を f とは異なるスカラー関数とする場合, 以下の式が成り立つことを示せ. ただし α, β はスカラーとする.

$$(i) \nabla(\alpha f + \beta g) = \alpha \nabla f + \beta \nabla g$$

$$(ii) \nabla(fg) = g \nabla f + f \nabla g$$

$$(iii) \nabla \left(\frac{g}{f} \right) = \frac{f \nabla g - g \nabla f}{f^2}$$

$$(iv) \nabla f(g) = \frac{\partial f}{\partial g} \nabla g$$

- (4) 原点 O に対する点 P の位置ベクトルを \mathbf{r} , $|\mathbf{r}| = r$ とする. このとき以下の式が成り立つことを示せ. ただし \mathbf{e}_r は \mathbf{r} 方向の単位ベクトルとする.

$$(i) \nabla r = \frac{\mathbf{r}}{r} = \mathbf{e}_r$$

$$(ii) \nabla \frac{1}{r} = -\frac{\mathbf{r}}{r^3} = -\frac{1}{r^2} \mathbf{e}_r$$

$$(iii) \nabla r^m = m r^{m-2} \mathbf{r} = m r^{m-1} \mathbf{e}_r$$